第 157 回大会

2018 年 11 月 17 日（土）・18 日（日）　　京都大学　吉田キャンパス

口頭発表・ポスター発表・ワークショップ要旨

The 157th Meeting of the LSJ

Kyoto University, at Yoshida Campus, on November 17th and 18th, 2018

Abstracts of Oral Presentations, Poster Presentations, and Workshops

<口頭発表　Oral Presentations>

[A-1]

現代中国語の 2 種類の複雑述語“来Ｖ”構文と“Ｖ来”構文の相違点

朱 茜

日本語の「来る」と同様に，中国語の“来”にも本動詞用法と補助動詞用法の二つがある。本発表では，現代中国語の複雑述語のうち, 本動詞“来”を含む複雑述語“来Ｖ”と補助動詞“来”を含む複雑述語“Ｖ来”は，複雑述語の独立性やテンスのスコープが異なることを示す。統語法の面から“来Ｖ”構文と“Ｖ来”構文の間には，【1】本動詞を含む“来Ｖ”構文は単独で文を構成しても自然である，【2】補助動詞を含む“Ｖ来”構文では，目的語（動作対象）が特定的である必要がある，【3】本動詞を含む“来Ｖ”構文において，“来”により表される動作は完了助詞“了”の有無と関係なくすでに実現していることを含意するが, 補助動詞を含む“Ｖ来”構文では, 完了助詞“了”の位置により先行動詞Ｖと“来”の両方の実現状況が左右される，という 3 つの違いがあることを論じる。

[A-2]

中国語動量詞が数える個体と集合イベント

王 丹楓

中国語では，動作行為を数える時に，数は一般的に単独では現れず，“拳”“次”“顿”のような activity classifier（動量詞）と共に用いられる。中国語伝統文法（周 2012 など）では，動量詞が専用動量詞(動量詞としてしか用いられないもの)と借用動量詞（名詞から借用して動量詞になるもの）に分類されているが，その使い分けはまだはっきりにされていない。本稿では，人間がイベントを数える時に，動量詞の使い分けを認知的に考察し，さらに認知実験によって説明することを目的とする。中国語動量詞には焦点の当て方によって，集合読みのイベントと共起するもの（“顿”“番”など），個体読みのイベントと共起するもの（“拳”“眼”など），両方のイベントと共起するもの（“次”“回”）の 3 種類があることを示した。名詞が個体と集合という階層構造をもつことはよく知られているが，中国語動量詞の考察からイベントも階層化されている可能性があることを示した。

[A-3]

中国語の動詞重複分裂文における ROOT 移動仮説

胡 亜敏

中国語では，(1)に示すように動詞が重複して生起する動詞重複分裂文が見られる。

(1) [$_{Topic}$吃]，我是[$_{Focus}$吃过]，不过…

Cheng & Vicente (2013)では，文頭の「吃」は主題で，動詞そのものが TopP の指定部に移動すると論じている。動詞移動分析では，移動する要素と元位置に残された要素は必ず対応するという性質を持つ一方で，副詞が文末に現れる場合，主題位置の動詞は，否定辞・アスペクトマーカー・副詞と共起できないことから，動詞性が失われた要素だと捉えられている（Tsao（1987））。本発表では，動詞重複分裂文において，文頭に現れる「動詞」の性質を明らかにした上で，ROOT 移動という新たなアプローチを提案し，動詞重複のメカニズムを検討する。具体的には，語根の√ROOT，あるいは√RootP が移動し，主動詞は元位置に残され，アスペクトマーカーとの併合によって発音されて重複が生じることを示す。この仮説を用いることで，文頭と文中の動詞の性質上のずれを説明できることを主張する。

[A-4]

ベトナム語話者による日本語漢語理解における日越両言語の語彙使用頻度と音韻類似性の影響

ホアーン ティ ラン フォン

ベトナム語と日本語は，漢語を共有しており，書字が異なっているものの，意味が同じ同義語が多い。語彙処理においては，母語の第１言語（L1）と学習対象の第２言語（L2）の両方の語彙項目が言語非選択的（language non-selective）に活性化され，L1 と L2 の両言語の使用頻度と音韻類似性が，L2 の語彙処理に影響するかどうかを語彙性課題の実験で検討した。決定木（回帰木）分析で解析した結果，正答率の平均は 93.72％（標準偏差 SD は 24.26%）；反応時間の平均は 1,072ms（SD は 614ms）であった。語彙力の上位群で L2 の日本語の使用頻度が高い場合には，音韻類似性の違いが有意な予測変数となった。また，日本語の語彙力の下位群で，L2 の日本語の使用頻度が高・中の場合は，L1 ベトナム語の使用頻度の影響がみられた。ベトナム人日本語学習者の日本語語彙力の程度によって，日越両言語それぞれの使用頻度と両言語の音韻類似性が語彙処理へ及ぼす影響のパターンが異なることを示した。

[A-5]

ハイブリッド言語としての黒龍江省朝鮮語

髙木 丈也

本発表は，尚志市在住，朝鮮族第４世の談話分析をもとに黒龍江省朝鮮語の特徴を分析するものであ

る。分析の結果，（１）分析変種は慶尚道方言，（規範としての）中国朝鮮語，ソウル方言，朝鮮語の他方言，漢語などの影響を受けたものであること，（２）それらはそれぞれ異なる時代背景，要因によって流入したものであること，（３）コンサルタント群の朝鮮語能力は相対的に低下しつつあり，日常の言語使用においてはコードスイッチングが頻繁に行なわれていることなどが確認された。このように朝鮮族第４世の朝鮮語は，ある種，ピジン，クレオール的な性格を帯びながらも複数言語，変種を極めて流動的に取り入れ，相互作用を展開するものであることが明らかになった。また，こうした言語，変種の要素は，クラス内の友人間談話という単一ドメイン内における言語使用においても確認され，相互作用の遂行に寄与していることが明らかになった。

[A-6]

分裂文から見る日韓のコピュラの特徴

金 智賢

本発表では，日本語と韓国語のコピュラとされる「だ」と「ita」の働きと意味の違いを明らかにする一つの手がかりとして，いわゆる分裂文を取り上げる。文の前提を「の」「kes」の前に，焦点を「だ」「ita」の前におく「～のは～だ」「～kes-un ～ita」という構文が中心である分裂文は，日韓の違いについてはあまり触れられていない。本発表では，日韓分裂文の焦点の位置に現れ得る要素の不一致や，「の」と「kes」の意味的な違い，分裂文そのものの使用におけるズレなどから両言語の分裂文に重要な相違があることを指摘し，「だ」と「ita」の働きも異なることを示す。また，このような分裂文における違いは普通のコピュラ文に見られるそれと本質的に変わらないこと，基本的に韓国語は「A ガ B デアル（こと）」を，日本語は「A は B だ（よ）」を表すレベルに，それぞれのコピュラはコミットしているということを主張する。

[A-7]

新聞における日・韓外来語の使用傾向

林 廷修

人間の言語は様々な原因により絶えず変化する特徴を持っている点で生産性を持つと言える。このような言語の生産性は，その出現頻度と派生関係から見ることができると考えられる。特に，最近各国に新しく入ってくる言葉は西洋由来のものがその大半を占めている。このことから，本研究では日本語と韓国語における外来語を考察対象とし，新聞における実際の使用傾向及び品詞の派生関係から両言語の生産性について考察する。

まず，日本の『毎日新聞』と韓国の『東亜日報』における日韓外来語の全体的な出現頻度には大きな差がないことを報告する。次に，新聞における外来語の全体出現頻度を 100 とし，出現頻度の低いものから高いものまでの累積出現頻度を示した場合，日本語が韓国語より多様な外来語を幅広い範囲

で使うことを指摘する。最後に，品詞分布について日本語が韓国語より名詞から動詞派生への割合が高いため，比較的生産性が高いことを述べる。

[B-1]

再分析と依存要素間距離の交互作用

－自己ペース読文実験による検証－

岸山 健，広瀬 友紀，峰見 一輝，多田 明佳

人の文理解において再分析を最後の手段とする仮説 (Fodor & Frazier 1980) がある。しかし同節否定と依存関係を構築する否定極性項目(NPI)が主節に現れた場合，「同節に否定要素が出現する」という初分析の維持は記憶に負荷をかけうる。例えば主節と従属節の境界に NPI を配置した場合，NPI は主節ではなく従属節にあると再分析した方が記憶への負荷は軽減する。このような統語的には適格だが再分析すれば記憶への負荷が軽減する文を日本語母語話者に呈示し自己ペース読文実験を実施した。実験の結果，従属節があると判明した時点では初分析を維持しているものの，否定要素が現れた場合は NPI を従属節内へと再分析したことが支持された。これは「最後手段としての再分析」を基盤とするモデルへの反例となるだけではなく，人が再分析に失敗する際のリスクを考慮し，リスクが少ないと分かった場合には遡及的に再分析を行なうことを示す。

[B-2]

形態統語的逸脱文に対する適応効果

－事象関連電位を指標として－

矢野 雅貴，諏訪園 秀吾，荒生 弘史，安永 大地，大石 衡聴

本研究では，言語処理システムが形態統語的逸脱文に対して適応的な振る舞いを見せるのかを調べるために，正文（バラが枯れた。）・非文（バラを枯れた。）を作成し，実験内での正文と非文の出現頻度を操作した脳波実験を行った。実験の結果，動詞の呈示後，非文に対して P600 効果が観察され，その効果は，非文が正文よりも低頻度のブロックよりも，同頻度のブロックのほうが小さかった。また，非文低頻度ブロックでは P600 効果が増大していくのに対して，同頻度ブロックにおいては P600 効果が実験中に減衰していくことが明らかとなった。この結果は，日本語母語話者が，実験中に形態統語的逸脱文に対して即時的な適応を見せることを示唆している。

[B-3]

Effects of the inferred affectedness factor in the next-mention preferences in Japanese

Kentaro NAKATANI, Shoko SHIDA

This study investigates the interaction between the inferences from the event denoted by sentence Si and the preferences for the “next mention” (i.e., what is expected to be mentioned first in the following sentence Si+1), through two off-line experiments: the first was a rating study, and the second was a sentence continuation study using a subset of the sentences used in the first. Some previous studies (Stevenson et al., 1994, 2000) argue that event structure and thematic relations play a significant role in the choice of the next mention. We point out conceptual problems about this approach, and argue instead that non-thematic, inference-based factors such as affectedness and awareness make better predictions regarding the next mention.

[B-4]

単語埋め込みに基づくサプライザルのモデル化

浅原 正幸

ヒトの文処理において頻度情報が読み時間に影響を与えるという仮説がある。日本語の心理言語学研究では基本句に相当する文節単位で読み時間を評価する一方，コーパス言語学では文節単位に基づいて頻度を計数せず，国語研短単位などの斉一な語の単位に基づいて頻度を計数する。この単位の齟齬が，頻度情報に基づく日本語の読み時間の影響の分析を難しくしていた。この問題を解決するために単語埋め込みによる読み時間の推定を行う。「国語研日本語ウェブコーパス」から生成した単語埋め込み nwjc2vec による分析の結果, Skip-gram に基づく単語埋め込みが読み時間の分析に有効であることを確認した。単語埋め込みの隣接ベクトルのコサイン類似度が「文節間の隣接確率」を，ノルムが「どのくらいさまざまな文節と結びつくことができるか」をモデル化する。さらに単語埋め込みを考慮しても，係り受けの数に基づく効果が確認できた。

[B-5]

ジンポー語における動詞連続構文の制約

倉部 慶太

発表者の一次資料に基づきながら，ジンポー語（シナ・チベット語族）の動詞連続を形作る様々な制約を検討する。形式的に，動詞連続の構成動詞は常に隣接しなければならない（隣接性制約）。これにより，後続動詞の全ての項は動詞連続全体の前に実現される。類像性に注目すると，構成動詞の配列順序は類像的でなければならない（類像性制約）。これにより，構成動詞は時間的順序に従って配列される。意味・語用論的に，単一のまとまりがあると話者に認識される下位事象が動詞連続としてまとめられる（単一事象制約）。はっきりと異なる下位事象は動詞連続を用いて表現できない。動詞の組み合わせの規則性に注目すると，同じ意志性を持つ動詞が動詞連続を形作る（意志性調和の原則）。動詞連続の項構造は, 構成動詞の項構造の合計に基づく。項として実現される名詞の規則性に注目すると，重複する意味役割は単一の動詞連続に同時に生起できない（二重役割制約）。

[B-6]

チワン語龍茗方言における声調の変調

－2 音節連続語を中心に－

黄 海萍

本発表は，チワン語龍茗方言の 10 個の基本声調が，2 つの音節が連続した環境において，それぞれどのように変調するかを明らかにすることを目的とする。母語話者である筆者によって産出された 200 の 2 音節連続語あるいは句（第 1 音節と第 2 音節のそれぞれを分析対象とする 100 語[10 声調×10 声調]）を音響音声学手法によって分析した。分析の結果，1）龍茗方言の 2 音節連続における変調は第 1 音節にのみ生じ，第 2 音節には変調も音節の持続時間の変動も観察されないこと，2）変調によって，ある声調が別の声調と中和することはないこと，3）龍茗方言の変調は声調の種類の違いや意味・統語構造の違いに関わらず，第 1 音節の音節持続時間の短縮によって，その音節のピッチ曲線の後半部分が切り詰められるというものであり，武鳴方言や龍州方言などの他のチワン語方言に報告されている変調と比較して単純であることが明らかになった。

[B-7]

ベトナム語の機能語 của, sự, không, bị の文法化過程の検証

－16～19 世紀の文献から－

鷲澤 拓也

ベトナム語で，かつて内容語だったが現代までに機能語になった 4 語を取り上げ，それらの語がいつ頃文法化したのかを明らかにする。16～19 世紀の各世紀から 1 件ずつ文献を取り上げ，その中での全用例を検討し，他の文献も参照した結果，少なくとも書かれた言語においては，所有関係を表す của（名詞「財産」から文法化）と名詞化を表す sự（名詞「こと」から）は 19 世紀末以降，否定の副詞 không（「空（から）の」「虚しい」「空（くう）」から）と受身や被害を表す助動詞 bị（動詞「被る」から）は 18 世紀後半から 19 世紀前半に，文法化されたといえることがわかった。これらのうち không 以外は，同じ用法の他の語に取って代わったのでなく，新たに現れた文法事項である。

この研究は，19 世紀以前に書記言語としての使用が稀であったベトナム語が，書記言語として用いられるようになるに際して，高級語彙と共に文法表現も新たに備えていったことを示す足掛かりとなる。

[C-1]

自得型テモラウの意味・用法について

朱 冬冬

今までの分類の観点では，十分に説明できない自得型の機能をもつテモラウ文を BCCWJ から抽出して詳細に論じた。自得型とは，「元気を分けてもらう」のように，通常のV-テモラウが示す動作主体の実際的な行為や心的状況を指示したり表現したりするものではなく，テモラウ主体の体験や動作主体によって引き起こした事態を表現主体の捉え方によって成立するテモラウ文である。達成の自己制御性の低い事態であり，V-テモラウ事態は動作主体の行為と一致しないのがこのタイプの基本である。本発表は，成立事態の特徴に基づき，中心的な契機型と周辺的な依存型に区分し，さらに，事態の影響のあり方から自得型と受影型の間で揺れ動くものを含めて三分類した。依頼型・受影型と比べて，自得型は事態の持つ働きかけ性が典型から外れ，受影型の直接受影とは異なり，間接受影的事態が基本である。そのため，自得型を 1 タイプとして見なし，論じる必要性がある。

[C-2]

受身・可能とその周辺構文によるヴォイス体系の対照言語学的考察

—古代日本語とスペイン語—

志波 彩子

古代日本語のラル構文と現代スペイン語の se 中動態は，ヴォイス体系の中で同じように「自然発生」の自動詞構文から受身や可能の意味を表す構文を発達させているが，両言語の受身と可能の内実（構文タイプ）は重ならない。Se 中動態には有情主語の受身がなく，動作主を背景化した自動詞相当の非情主語受身が発達しているのに対し，ラル構文では自動詞相当の非情主語受身は類型が非常に限られており，有情主語受身が中心である。また，se 中動態が表す可能は，総称的行為者の超時的事態で，主に対象もしくは場所が行為実現の許容性を持つ潜在系可能であるのに対し，ラル構文の可能は個別特定の行為者の一回的で具体的な事態が一時的な状況により実現しない／することを述べるものである。本発表では，どのような発達の要因によりこのような体系のずれが生じたのかを考察し，再帰や非人称，自発といった他の構文との関係を分析した。

[C-3]

指示詞の有標的な用法

—類型論の確立を目指して—

孟 鷹，大島 デイヴィッド 義和

指示詞には通言語的に (i) 外部指示 (直示) 用法，(ii) 照応用法，(iii) 認識用法という 3 つの主要な用法が見られる (Diessel 1999 など)。一方，これらの無標的用法とは区別される有標的用法が存在することが，主に個別言語学的文脈で議論されてきた。本研究では，外部指示・照応・認識の 3 分類に，[±非制限 (性)]・[±情意 (性)] を組み合わせた 3 次元のタクソノミーによって，指示詞の無標の用法

と，有標の用法のうちの多くを整理分類することが可能になり，通言語学的・類型論的な比較考察が容易になることを論じる。個別言語の便宜的サンプルとして，日中韓英の 4 言語を用いる。

[C-4]

「ビールに行こう」？

—移動の目的を明示する表現に関するチェコ語と日本語の対照

浅岡 健志朗

日本語の「N（名詞）に行く」や「V（動詞連用形）に行く」という構文との対照を通して，チェコ語の「jít na N」構文と「jít INF（不定詞句）」構文の特徴を多角的に記述する。「jít na N」構文において主語と N（のそれぞれの指示対象）の関係は文脈に応じて柔軟に解釈されうるが，(i)「具体的な飲食物 N を飲食するために（飲食店に）移動する」(ii)「野生の動植物 N を狩猟・採集するために（それが可能な場所へ）移動する」(iii)「イベント N に参加するために（そのイベントが催される場所へ）移動する」の三種の解釈が優先される。「N に行く」構文は (i) (ii) はほとんど表現不可能だが，(iii) は表現できる。全体として「jít na N」構文は「N に行く」構文よりも主語と N の関係を指定する必要性が低い。また，チェコ語の両構文には，移動を伴わない意志を表す表現への文法化が観察される。両言語の各構文は，移動とその目的を表す際に（他の目的を表す形式と異なる）特別の形式を用いる現象の一種とみることができる。

[C-5]

日本手話，台湾手話，韓国手話の語における意味の変化

相良 啓子

本発表では，歴史的に関連のある日本手話，台湾手話，韓国手話における意味の変化について，三手話に形が共通してみられる表現を取り出し，その中にみられる意味変化を明らかにする。音声言語では，意味の向上・下落・拡大・縮小・分岐・推移など様々な種類の変化が知られているが，手話言語においても，意味の縮小・拡大・意味の分岐がみられることを示す。例えば，こめかみ付近に当てた利き手のこぶしをすばやく下に下ろす表現をみると，日本手話や台湾手話では，「日が昇る頃から正午までの『午前』」の意味で使われるが，韓国手話では「日が昇る前の時刻」となっており，意味が変化したことがわかる。また，利き手の手のひらを非利き手の腕に沿って上から下へなでるように動かす表現と，非利き手の甲を利き手の手のひらで腕側にこすり挙げる表現は，ともに三言語すべてでみられるが，それぞれ意味が様々であり，分岐後に意味変化がおこったことがわかる。

[C-6]

大阪泉州方言における「ら」の複数性

大島 一

日本語の複数を表す「ら」は，共通語では一般にヒト名詞にしかつかないが，先行研究によると，関西方言では，非ヒト名詞のみならず，様々な無生物名詞につき（教科書ラ，靴下ラ，パトカーラ），複数を表す。この「ら」は，「〜なんか」といった「例示」の意味としても使われ，和歌山および高知においても同様の用法が見られる。特に高知では様々な無生物名詞に「ら」が付く（上野，2001）。

しかし，大阪泉州地域（岸和田市）の年配の話者らによると，無生物につく「ら」は，複数を表す意味用法では使用されず，例示の意味でのみ使われるということがわかった。

本発表では，大阪泉州方言における「ら」の意味用法が，他，関西地域における「ら」とは異なるものであることを示すと同時に，関西方言における無生物の複数用法は，若者世代によるイノベーションの結果であることを主張する。

[C-7]

宮古語の動詞形態論における拡張語幹：

あるべきか，あらざるべきか

林由華，ケナン・セリック

複雑な動詞形態論を持つ言語を分析する際には，接辞が一貫して動詞の語根に直接に付くという分析 (i) と，拡張語幹を想定して，接辞がその中から適切なものに付くという分析 (ii) と，どちらの分析を採用するべきかという問題がしばしば生じる。宮古語の個別の方言を詳細に扱った主な先行研究はいずれも (ii) の拡張語幹の分析を採用している（大神 : Pellard 2009，池間 : 林2013，伊良部長浜 : Shimoji 2018，下地皆愛 : セリック2018）が，その根拠は必ずしも明らかにされていない。本発表では，多良間方言および池間方言に起こった動詞形態論における歴史的な変化に着目し，そこで拡張語幹単位での交替とみなせる現象が起こっていることを示す。そして，これを主たる根拠として，宮古語においては拡張語幹を想定するのが妥当であることを主張する。

[D-1]

促音の知覚における先行母音・後続母音持続時間の影響：

鹿児島方言若年層の場合

小林 祐貴，竹安 大

シラビーム方言である鹿児島方言の若年層は，モーラタイミング方言話者と比べて促音の持続時間が短いというシラビーム方言の特徴を保持する一方で，促音に先行する母音は長く，促音に後続する母音は短くなるという点ではモーラタイミング方言とよく似たパターンを示すとされている。こうした

音声産出における時間制御の特徴が音声知覚における手がかりとして用いられるか調べるため，2 音節語の子音と母音の持続時間を操作した刺激を用い，鹿児島方言および福岡方言（モーラタイミング方言）若年層を対象とした知覚実験を行った。その結果，福岡方言若年層と比べて鹿児島方言若年層の促音判断境界値が低く，両方言共に促音に先行する母音が長いほど，また，後続する母音が短くなるほど促音判断境界値が低くなることが明らかとなった。以上のことから，鹿児島方言若年層の促音及び隣接母音の時間制御において音声産出と音声知覚が対応することが示唆された。

[D-2]

北琉球沖縄語伊江方言の破裂音

青井 隼人

沖縄語伊江方言をはじめとする北琉球のいくつかの言語では，閉鎖音に 3 つの系列が認められる（例：[p^h, ˀp, b]）。これらの 3 系列は，次の 3 点によって互いに音声的に区別されると言われる：(i) 有声性（b vs. p^h, ˀp），(ii) 帯気性（p^h vs. ˀp, b），(iii) 喉頭の緊張（ˀp vs. p^h, b）。本発表では，伊江方言を対象とした現地調査で新たに収集した音響的資料に基づき，破裂音クラスにおける 3 項対立がどのように実現されているかを記述する。

観察の結果，喉頭の緊張と相関するとされる音響特性は 3 系列のいずれにも認められなかった。すなわち伊江方言の 3 項対立は (i) 有声性および (ii) 帯気性によって充分に実現されており，したがって三者はそれぞれ「無声有気 [p^h] / 無声無気 [p] / 有声無気 [b]」と音声的に解釈できる。従来の研究の多くは，共鳴音（鼻音と流音）に加えて，閉鎖音にも喉頭化の有無による音韻的対立を認めてきたが，本発表の結果はその解釈の再検討を促すものである。

[D-3]

出雲仁多方言の母音をめぐる音変化について

平子 達也

本発表では島根県出雲地域諸方言の一つである仁多方言（同県仁多郡奥出雲町旧仁多町方言）における母音をめぐる音変化について論ずる。まず，仁多方言において（1）歯茎阻害音の後で*i と*u が中舌母音化したことを示し，また，上代中央方言との比較から仁多方言では（2）特定の条件下で*i > e, *u > o という変化が起こったことを示す。さらに（3）出雲方言に広く認められる*(C)Vr{i/u} > (C)VV という変化に関連して，仁多方言では*Cir{i/u} > Cjaa，*Cur{i/u} > C(w)aa などの他の出雲方言にはない変化が起こったことを示す。最後に，これら 3 つの音変化の相対年代について考察した上で，中央方言との対応からは例外となる仁多方言の kusoo（「薬」）という形式について，琉球諸方言等との比較から，そこに含まれる母音 o が日本祖語に遡りうるものであることを論ずる。

[D-4]

『リグ・ヴェーダ』の韻律における印欧祖語の喉音の反映と方言差

塚越 柚季

讃歌集『リグ・ヴェーダ』は，いくつかの家系の詩人らに作られ，各巻の成立年代も異なる。さらに，広い地域で成立したため，方言差も認められる。印欧祖語の喉音 *H はアナトリア語派以外の印欧語で本来の音価を消失した。しかし，Gippert (1997) は『リグ・ヴェーダ』の韻律が不規則な箇所に喉音の残存を想定することで，韻律が復元されると提案した。彼は韻律を修正された語が他の箇所でどのような韻律になるかは言及しなかった。筆者の調査によれば，ある語に対し喉音を補うことで韻律復元が可能な場合と，逆に喉音を補ってはいけない場合とが確認される。そのような語ごとの喉音の残存有無が，詩人間の言語の違いの反映だと仮定し，該当箇所を検討した。第 7 巻の Vasistha 家集はじめいくつかの詩人家系で喉音の残存が他の家系より顕著に確認された。地理的要因は不明のままだが，喉音の残存と詩人家系との連関が見出された。

[D-5]

中国語・内蒙古語・モンゴル語の語頭閉鎖音における VOT の差異

植田 尚樹

中国語，内蒙古語，モンゴル語（ハルハ方言）は，語頭閉鎖音において，短い VOT を持つ無気音と長い VOT を持つ有気音の対立があるとされる。しかし，一般に VOT の取り得る値は言語によって大きく異なっており, 同じ有気音でも音声的なカテゴリーはさらに細かく分類されることが知られている。この点に鑑みると，中国語，内蒙古語，モンゴル語が同じような VOT の値を取るかどうか，先行研究からは定かでない。本発表では，これら 3 言語の語頭閉鎖音の VOT の値を比較し，有気音ではおおむね中国語，内蒙古語，モンゴル語の順に VOT が長く，中国語とモンゴル語は音声的分類では異なるカテゴリーに入ることを示す。そして，VOT に関して内蒙古語が中国語とモンゴル語の中間的な様相を呈するのは，内蒙古語話者が中国語とのバイリンガルであること，および内蒙古語と中国語の言語接触が大きいことに起因する可能性が高いことを述べる。

[D-6]

An interaction between voicing and tone in Dränjongke fricatives

Céleste GUILLEMOT, Seunghun J. LEE

Dränjongke, a Tibeto-Burman language spoken in Sikkim, India, is a type of language with a 3-way laryngeal contrast in fricatives: voiced, voiceless, and devoiced (van Driem 2001). We propose that the fricative contrast in Dränjongke must consider both voicing and f0; voiceless fricatives are followed by a vowel with high f0, and

devoiced fricatives are followed with low f0. There was a gender-based difference in the production of voiced fricatives. Female speakers have voicing at the onset of the fricatives, while male speakers didn't produce such voicing.

[D-7]

Accentuation in Tokyo and Kyoto Japanese:

Toward a unified account

Yu TANAKA

Ito and Mester (2016) have given a formal account of accentuation in Tokyo Japanese. I extend their analysis to Kyoto Japanese. In both dialects, regular antepenultimate accent can be derived through trochaic footing with final extrametricality, e.g. (ka'na)da 'Canada', and unaccentedness through exhaustive footing, e.g. (ame)(rika) 'America'. One distinctive feature of Kyoto Japanese is that it assigns penultimate accent to some three-mora items. I argue that penultimacy arises with a trochaic head foot which is shifted rightward due to the realization of initial L tone, as in ba(na'na) 'banana' with an LHL tonal pattern. The proposed analysis not only formally unifies the two major dialects of Japanese but also accounts for some "gaps" in the accent patterns of Kyoto Japanese.

[E-1]

スロッピー解釈の三つの出自

森山 倭成

本発表では，まず日本語の空項における所謂スロッピー解釈について考察し，経験的データを提示することによって，この解釈が i）束縛変項，ii）同一指示，iii）話者の知識（本人にしか行うことのできない動作など）という異なる三つの手段から得られることを主張する。先行研究ではスロッピー解釈を診断する際に「自分」が用いられることが多いが，本発表では「自分」に加えて「彼」，「彼女」を用いて議論する。

次に，前述の主張を踏まえた上で，空項研究の文脈において，スロッピー解釈という用語で一括りして議論が進められることの問題点を指摘する。空項のスロッピー解釈を巡っては省略現象に帰する立場（主には束縛変項を用いた分析）と代名詞の性質に帰する立場の大きく二つが存在するが，本発表ではスロッピー解釈に関する議論には齟齬が生じており，両分析はこの解釈に関して実質的な対立関係にない可能性が高いということを論じる。

[E-2]

前置詞残留からみる削除現象の派生

臼井 悠香

要素の移動が想定される現象である削除現象には，前置詞残留を許すものとそうでないものがある。例えば，Sluicing や Fragments は前置詞残留を許し，Gapping, Pseudo-gapping, Multiple Sluicing, Stripping は前置詞残留を許さない。前置詞残留は，wh 移動などの左方移動の場合にのみ生じ，Heavy NP Shift などの右方移動では不可となる(Ross 1967, Drummond, Hornstein and Lasnik 2010)。Gengel (2013)は，Pseudo-gapping は残余要素の vP の左方周辺部への移動と VP 削除により派生すると主張しており，同様に Sluicing と Fragments は残余要素の CP 指定部への移動と TP 削除，Gapping は残余要素の CP の左方周辺部への移動と TP 削除により派生すると論じているが，これらの現象をすべて左方移動で分析すると，Sluicing だけが前置詞残留を許すという事実を説明することができない。そこで，本発表では，前置詞残留を許す現象は残余要素の左方移動，許さない現象は残余要素の右方移動を伴うと想定し，前置詞残留の認可の違いの説明を試みる。さらに，以上の特性を踏まえ，それぞれの現象の派生を明らかにする。

[E-3]

Argument ellipsis of focused phrase

Hideki YAMASHITA

The aim of this work is to shed a new light on the discussion regarding argument ellipsis (AE) in Japanese with respect to focus, showing that not all the cases of focus prevents AE to take place. One of the curious constraints on AE is that focused phrases cannot undergo AE (Funakoshi 2012, Sugisaki 2012, Oku 2013, 2016, a.o.). What had gone unnoticed is that that the typical instance of AE can be a legitimate/grammatical answer to a Wh-question. Given that such an answer is not only semantically focused (Jackendoff 1972, Rooth 1988, 1992 a.o.) but also phonologically focused (Nishigauchi and Hidaka 2013), this means that focused phrase can undergo AE, contra the previous findings.

[E-4]

Leftward and rightward clause movement in Mongolian

Shulun, Hideki MAKI, Megumi HASEBE, Lina BAO, Yuta SAKAMOTO

This paper investigates the mechanism of genitive subject licensing in sentences with clause displacement in Mongolian, an SOV language, and shows that Mongolian allows genitive subjects (i) when complement clauses move across their subjects by scrambling, and (ii) when complement clauses are placed at the right edge, and are separated from their subjects by a clause boundary. These findings suggest (i) that the two conditions on genitive subject licensing (D-licensing and adnominal form licensing) proposed in Maki et al. (2016) need to be slightly revised in such a way that c-commanding licensors should be relaxed to incorporate nominal elements and CPs

in Mongolian, and (ii) that displacement to the right actually involves rightward movement to a c-commanding position.

[E-5]

東京方言における主格属格交替現象と総記のガに関して

佐久間 篤

東京方言では，「主格属格交替現象」が起こり，ある種の従属節の中では主語に「が」が付与されることも「の」が付与されることも可能である。生成文法の枠組みの中で様々な分析があるが，(1)の容認性の違いを説明できるものは少ない。また，久野(1972)によると，格助詞のガには，述部が動作・存在・一時的な状態を表す時に現れる「中立叙述」と，それ以外に述部が恒常的状態と習慣的動作を表す時にも現れる「総記」の二種類ある。本発表では，「主格属格交替現象」において，主語が「中立叙述」の場合は「の」主語が現れ，「総記」の場合は「が」主語が現れるため，(1)の容認性の違いが生まれると主張する。また，「の」主語は vP の指定部に留まり解釈され，「が」主語は TP の指定部に移動し解釈されると主張する。

(1) 私{??が/の}買う本はこれだけど，今日は買わない。(佐久間 2017: 131)

[E-6]

日本語の wh 構文の考察：

島の制約と wh 句の構造

中島 優

本発表は，日本語の wh 構文には無差別束縛が関与していることを示し，複合名詞句制約における wh 項と wh 付加詞の非対称性は，wh 句の構造に起因すると主張する。始めに，日本語の wh 構文の代表的な分析である素性照合と無差別束縛を比較し，後者の方が理論的に優れていることを示す。次に，無差別束縛を仮定した上で，日本語の wh 項と wh 付加詞は異なる内部構造を持つと提案し，その帰結として，GB 以来の重要なトピックであった複合名詞句制約における wh 項と wh 付加詞の非対称性を導く。最後に，本発表の理論的示唆として，主要部移動は統語的操作であることを示す。本発表の位置付けは，LF 移動が破棄された Chomsky(2000)以降の文法モデルにおける Tsai(1994)の洞察の再定式化である。

[E-7]

敬語表現の統一的説明に向けて

大野 公裕

本発表では，(1a)の尊敬表現「お／ご〜になる」（Subject Honorification, SH）と(2a)の謙譲表現「お／ご〜する」（Non-Subject Honorification, NSH）はそれぞれ概略(1b)と(2b)に示した基底構造を持つと仮定し，敬意の対象となるNP（Harada 1976に従い“SSS”）の決定に関して統一的説明を提案する。

(1) a.　先生が論文をお書きになった。

b.　_____［vP 先生が［VP 論文を 書き］v］n[+H]に なった

(2) a.　花子が先生をお招きした。

b.　花子が［vP［VP 先生を 招き］v］n[+H] した

本分析では，SHの「なる」は上昇動詞，NSHの「する」はコントロール動詞であり，それぞれのvP補部は敬語素性[+H]を付与されたnによって名詞化されていると仮定する。さらに，主要部移動によって形成されるV-v-n[+H]の連鎖はPFで「お／ご-V-v」として具現する一方，SSSの決定は指定部−主要部の一致ではなく，n[+H]の最小探索によって行われると主張する。ただしその際，NSHにおけるvP補部は外項（PRO主語）を持たないため，SSSがSHでは主語で，NSHでは目的語になることが自動的に説明される。

[F-1]

線条的類像性

—認知類型論的アプローチ—

鍋島 弘治朗，堀江 薫，水本 篤，プラシャント・パルデシ，ジェプカ・ラファウ，
北野 浩章，堀口 大樹，古本 真，オ・ヨンミン，エルチュルク・ダムラ

言語にとって構造と順序は二大要素であり， (1)において時間的順序が言語の線条性に反映されるのは，類像性としてよく知られた現象である（Haiman, 1980）。

(1) Veni, vidi, vici （来た，見た，勝った）

本発表は言語類型論と認知言語学を複合した観点から，統計的手法を援用し，線状的類像性の研究に新たな知見を提供する。

統語，慣用句，複合語において，順序は好むと好まざるに関わらず発生する。この順序は完全に恣意的なものではない。例えば，(2a)と(2b)は，どちらも時間的順序に動機づけられている。

(2) a. 朝晩　　b. morning and evening

(3) a. 父母　　b. mother and father

一方，(3a)と(3b)の順序の相違は文化性によるものと考えられる。本発表では 70 のペアを 12 言語で類型論的に検討した結果を，クラスター分析とコレスポンダンス分析を含めて報告する。

[F-2]

日本語オノマトペの統語転換現象に対する認知言語学的アプローチ

－副詞・動詞・形容動詞が名詞になる場合－

朴 智娟

本研究の目的は，日本語オノマトペにおける統語転換 (conversion) 現象に対し，その分布状況や仕組みを認知言語学的観点から明らかにすることである。統語変換後に名詞用法として用いられるオノマトペは，典型的に次のような意味変化を起こす。(i) 変換前に音を表すものは，そのような音を放出するものあるいは放出するだろうと想定されるものを表し，(ii) ものの状態を表すものは，そのような属性，性質を持つ特定の具体物を，(iii) 身体の動作または様態を表すものは，そのような動作が含まれた一連の出来事を表す。(i) は，「部分ー全体関係」によるメトニミー拡張 (Gibbs 1999; Radden & Kövecses 1999) を起こしたものと捉えられる。一方，(ii) と (iii) は，その語の背景的世界知識，つまりフレーム (Fillmore 1975) を通して理解，解釈されるものである。

[F-3]

Typo, thinko, scanno：

エラーを表す-o の記述

萩澤 大輝

現代英語の主にインターネット上の文章で，scanno (スキャンの不具合による誤字) や clicko (クリックミス) のような新語が観察される。本発表は第一に，typo という語が略語として成立し，語末の-o が再分析を受けるまでの経緯を整理する。第二に，-o による新語の意味記述として「エラー」に加え，typo のもつ意味要素 (a) PC との関連性，(b) 言語，(c) 産出などを部分的に共有することが必要であると主張する。第三に，形式の面でも，定着事例である typo がモデルになっていることを-o の生起位置や語基の音節数の制約から示す。最後に，完全には慣習化していない新語の解釈が可能になる認知的な仕組みとして，アブダクション，知覚的補完，プライミングなどが関わることを論じる。

[F-4]

英語の *better off* 構文について

大谷 直輝

本発表では，英語の *better off* XP（以下，BO 構文）が持つ特性を構文文法の観点から考察する。*better off* には，現在分詞，過去分詞，形容詞のような XP の位置に通常は現れない補語句が後続して，全体が「XP｛の／をした｝方がましだ」という意味を表す用法が見られる（例 You'd be better off {buying it/left alone/dead}）。

本発表では，大規模コーパス（COCA, COHA, BNC 等）を用いて，BO 構文の定量的な調査を行うことで次の点を明らかにする。(i) BO 構文は better off {being/than} XP の単なる省略ではなく，形式面でも意味面でも独自の特徴を持つ構文である点。(ii) BO 構文に現れる語句には頻度の偏りが見られ，一人称・二人称の代名詞やスペース導入表現（if, would, without など）が頻出する点。(iii) XP が表す事態は，一般的にではなく話者にとって好ましい事態が多い点。(iv) BO 構文の典型的な機能は「助言」であり，そこから，「警告」や「勧誘」などの発話機能へ拡張する点。(v) XP に一度だけ現れる語（hapaxes）の割合は高く，BO 構文には高い生産性が見られる点。

[F-5]

インターフェイスにおけるラベルの働きについて

林 愼将

Chomsky (2013) では，統語構造はインターフェイスでの解釈のためにラベルが必要であると想定されている。本発表では，構造の解釈情報を与えるラベルの機能に着目し，英語の多重 wh 疑問文における元位置の wh 句の unvalued Q ([uQ]) 素性について議論する。

英語の多重 wh 疑問文では一つの wh 句が文頭に移動し，その他の wh 句は元位置に留まるが，wh 句が持つ[uQ]素性を考えると，移動した wh 句の[uQ]素性は Agree (Chomsky (2013, 2015)) 或いは Minimal Search に基づく<Q, Q>ラベル (Epstein, Kitahara, and Seely (2017, 2018)) により値を得る。しかし，元位置の wh 句はいずれの方法でも値が得られず，値の無い素性はインターフェイスで解釈できないため問題となる。本発表では，移動した wh 句が<Q, Q>ラベルを提供し，構造が wh 疑問文であるという情報をインターフェイスに与えることで，値が無い[uQ]素性を持つ元位置の wh 句が疑問の wh 句であると解釈されると主張する。

また，日本語の wh 疑問文やドイツ語等における形容詞と名詞との間の[phi]素性一致にまで議論を拡張する。

[F-6]

他動詞虚辞構文と主語倒置構文：

ラベル付けを排した素性一致理論による分析

岡 俊房

チョムスキーの提唱するラベル付け理論に基づく研究の多くが統語現象の説明を目指すものであり，ラベルそのものについて意味解釈上（及び形態的具現に関して）の必要性を具体的に論ずるものはなく，ラベルの存在自体に対して，そしてそれに依拠する統語理論に対して，根本的な疑問が生じる。

本発表では，ラベル付けに依ることなく，形態的な一致現象を証拠に持つ素性一致操作のメカニズムを自然な形で拡張･精密化することにより，言語の基本的な統語特性をラベル付け理論と同等以上に説明しうることを示し，理論上のみならず経験上もラベル付け理論の優位性がないことを主張する。具体的には，他動詞虚辞構文（標準英語と異なり Belfast 英語では許容される）及び様々な主語倒置現象（英語の引用倒置や比較倒置等，フランス語の文体的倒置や焦点倒置，イタリア語等の自由倒置）を考察し，主語位置に関わる問題（EPP 効果を含む）を論ずる。

[F-7]

Can "Determinacy + PIC" explain descriptions of Remnant Movement Asymmetries?

Hisatsugu KITAHARA, Samuel D. EPSTEIN, T. Daniel SEELY

Chomsky et al. (2017), clarify how simplest unified MERGE operates upon the Workspace (WS) and in accord with third factor Minimal Search (MS). One question is: when MERGE(X,Y) applies to the WS=[X,Y] adding

the newly-created {X,Y} to WS (where X, Y are LIs or sets), does the set {X, Y} *replace* X and Y, yielding WS'=[{X,Y}]?; or do X and Y *remain*, yielding WS"=[X, Y, {X,Y}]? They argue that WS' (and not WS") results from a third factor principle of Determinacy that governs Merge, employs MS, yet is delimited by PIC. Adopting these principles, we suggest that Takano-Müller's influential but descriptive generalization regarding remnant movement and Saito's important counterexample to it, are deducible from these independently motivated third factor principles.

[G-1]

不定代名詞束縛における再構築効果ととりたて詞「も」の分析

片岡 恋惟，大野 公裕

本発表では，とりたて詞「も」は Chomsky (2013)における等位接続詞に対する分析と同様に，最大投射を補部にとる（ラベルにならない）主要部であると主張する。その根拠として，まず(1)の容認度が，不定代名詞が派生のいかなる段階においても「も」の作用域外にある場合とは異なり，それほど低くなく，Saito (1989: 192)における(2)の例と同程度であることから，不定代名詞も wh 句と同様に再構築によって認可され得ると論じる。

(1) ?何を $_i$，太郎は［t_i 買い］もしなかった。

(2) ?どの本を $_i$ メアリーが［ジョンが t_i 図書館から借り出した］か知りたがっていること。

次に，不定代名詞が主語である(3)の例もその容認度が(1)と同程度であり，再構築によって認可されているとすると，「も」の作用域は vP であることになる。したがって，「も」は従来の分析（cf. Kishimoto 2001, Hiraiwa 2005）のように主要部への付加詞ではなく，最大投射を補部にとる主要部であると考えられる。

(3) ?誰が $_i$［$_{vP}$ t_i 本を買い］もしなかった。

[G-2]

ノとコト再考:

主文述語の新たな意味分類に向けて

山田 彬尭，窪田 悠介

日本語の補文節を取る述語の一部が補文標識ノとコトとの共起可能性において違いを示すことはよく知られているが（「太郎は東京に行く｛*の/こと｝を決意した」「太郎は花子が来る｛の/*こと｝を見た」），先行研究は(i)分類の根拠が不明確，(ii) 鍵となる概念に対して客観的な証拠がない，(iii) 反例が少なからず存在する，という問題を持つ。本研究では，(i) コーパスからのデータ採取で分類を行い，(ii) 鍵となる概念に対する具体的な言語テストを提案し，(iii) 分析対象を明確にし反例による反証可能性を保つ，という方法でこの問題に対する新たな提案を行う。具体的には，コトとの結びつきが強

い述語は，信念主体の信念のあり方とその表出の仕方のみで真偽が決まるのに対し，ノとの結びつきが強い述語は, 信念主体と外界の事態との間に存在する何らかの積極的な関係性を述べるものである，という提案を行う。

[G-3]

前提投射の実例のツリーバンクによる検索

窪田 悠介，峯島 宏次

言語理論研究，自然言語処理研究双方において，コーパスから複雑な言語データを効率よく抽出する必要性が近年急速に高まっている。本研究では，国立国語研究所で開発中の NPCMJ ツリーバンクを用いて前提投射の実例の検索を行うことで，統語構造に基づいた検索の，言語研究における有用性を議論する。具体的には，現在 web 上で公開中の NPCMJ 検索インターフェースを用いて，(i) 埋め込み節，(ii) 条件節，(iii) モーダルに埋め込まれた環境の３つの条件で，前提トリガーとして累加的意味を表す取り立て詞・副詞の「も」「まで」「再び」「さらに」を用いて実例の収集を行った。実例 1 万文という比較的小さい規模のコーパスでも，該当する語の言語学的分析や，言語学的知見に基づいた自然言語処理研究のためのテストセットを作るために十分な量のデータを得られることを確認した。

[G-4]

所有を表す have got における発話行為性

日高 俊夫，今西 真弓

主にイギリス英語で会話を中心に用いられ,「have と全く同じ(exactly the same)意味を表す(Swan 2016)」とされる, 所有を表す have got (以下 HG)を共時的に分析する。具体的には, 先行研究(登田 1994; Tamura 2005)において「発話時における(一時的)所有」という概念が HG の中核的意味として仮定されているのに対して，本発表では発話行為的側面に焦点を当て，HG は「主張行為(話者が真であると思う命題を新情報として提供し，会話の進歩に貢献する行為)」(Tomioka 2010)を要求することを示す。このことにより，現在時制であっても単なる事実描写文では HG の容認性が低い一方で，先行研究において容認性が低いとされる「過去時制での使用」「不可分所有」「習慣的状態」「総称文」においても，それを真の値を持つ(と話者が判断する重要な)新情報として提示するような文脈では容認性が向上する事実や，データに対する先行研究の容認性判断における齟齬が説明される。

[G-5]

Sublexical modality in permission and obligation causative

Yusuke YAGI

Various languages have two forms of periphrastic causative verbs, obligation and permission, for Example, English make and let, Japanese o causative and ni causative. In this study I argue that the difference in meaning of the two types of causative verbs reflects difference in their sublexical modal forces. Obligation causatives have universal force, while permission causatives have existential force. I further analyze their actuality in past episodic reading is a result of interaction between their modal component and grammatical perfective aspect. As consequences of this analysis, we correctly predict existence of modal presupposition in causative constructions and the meaning of negated counterpart of these verbs.

[G-6]

A contrastive study on the asymmetry of nominative and accusative case drops in Japanese and Korean

Shaoyun YU, Katsuo TAMAOKA

The drop/omission of the nominative case marker is suggested to be less frequent and less acceptable than the drop of the accusative case marker in Japanese and Korean (Ito, Tahara, & Park, 1991; Saito, 1983; Lee, 2012; Ahn & Cho, 2006). This study investigated the perceived acceptability of case-dropped sentences among native Japanese speakers and native Korean speakers with a paper-based survey. Our results first confirm that animacy of the object, which modulates object case marking in languages like Sinhalese, also plays a role in Japanese and Korean (Lee, 2009; Fry, 2003). Furthermore, we found that while nominative case drop was less preferred than accusative case drop in SOV for both languages, Japanese and Korean differed dramatically in OSV.

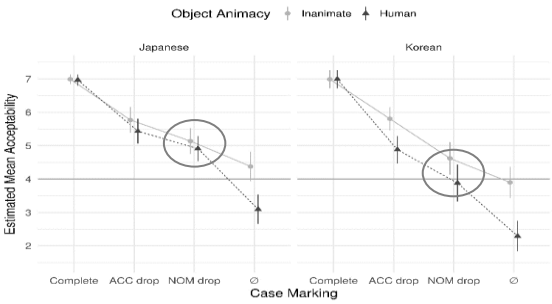


Figure 1. The effects of case marking and object animacy in SOV

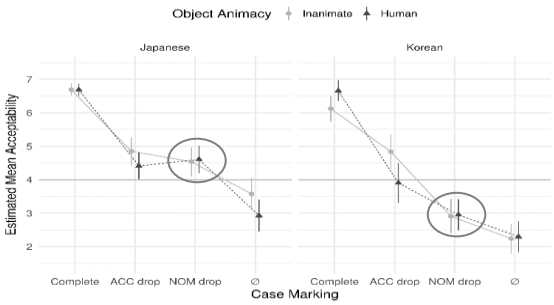


Figure 2. The effects of case marking and object animacy in OSV

[G-7]

What '-nakereba naranai' should and must be

Shun IHARA

The aim of this study is to explore the semantic nature of -nakereba naranai in Japanese. The necessity modal -

nakereba naranai is widely thought to take a deontic reading (e.g. Narrog 2009, Larm 2006). The other reading that we will investigate in detail is so-called pseudo-epistemic reading (Yalcin 2016, cf. Copley 2006), a reading that the literature has paid little attention to. How can we give a unified account of the two readings of -nakereba naranai? In this study, we argue that -nakereba naranai is interpreted as expressing universal quantification over normality rather than Kratzerian modal base and ordering source (Kratzer 1981/1991) through a comparison with should and must in English.

[H-1]

アミ語の -ay における名詞，動詞，認識モダリティの関連

今西 一太

本発表では，アミ語談話データの中から -ay という接尾辞のついた語を分析し，以下のことを主張する。

(a) -ay がついた語は「～する者だ」（名詞化）と「確かに～した」（認識モダリティ）の両方の意味で解釈できる例が多く，区別をすることが難しい。つまり，アミ語においては「～する者」型の名詞化と事実であることを強調するモダリティは意味的に連続しており，明確に区別できない。

(b) 名詞を表す標識 u= が -ay のついた語についたりつかなかったりし，動詞と名詞の中間的な特徴を示す。ただし，-ay のついた語に明確な指示対象が無い場合，この u= がつかない。「名詞は談話内の参与者を指し示し，動詞は物事の発生を述べる」という原則に沿った現象である。

(c) 名詞と動詞の区別がつきづらい例はタガログ語など他のオーストロネシア語にもあるが，モダリティと名詞化，動詞と名詞の中間的な特徴を持つという現象がこれに関連しているのはアミ語だけである。

[H-2]

オリヤ語における，２つの人称・格制約

山部 順治

人称・格制約とは，次のような規則である：文中に２個の内項（受け取り手，対象）が現れる場合，統語的に下位のほうの項は１または２人称であってはならない。同制約の事例は諸言語において知られている。

本発表は，オリヤ語に人称・格制約が２つあることを報告する（制約 A, B と呼ぶ）。オリヤ語の２者は，他言語における既知の諸事例とは，一線を画す特徴を示す。次表のとおり。

<table>
<tr><td></td><td>① 下位のほうの項は，
[　　]であってはならない。</td><td>② 制約適用は，文述語が下位のほうの項と一致を標示する場合に[　　]。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">制約 A
既知の諸事例</td><td rowspan="2">１・２人称</td><td>限られない</td></tr>
<tr><td rowspan="2">限られる</td></tr>
<tr><td>制約 B</td><td>１・２人称，または複数</td></tr>
</table>

変異が生ずる経緯を，次のように考える。既知の諸事例が典型的だ：通言語的に圧倒的大多数を占めるから。オリヤ語の２制約は，そこから，適用条件を項目①②に関して緩めたものだ。①指示的素性：制約 B は（人称だけでなく）複数性にもかかる； ②文法レベル：制約 A は一致の標示の有無を問わない。

[H-3]

ペルシア語の焦点構文におけるコピュラの生起制限

野元 裕樹，大久保 弥

伝統的ペルシア語文法では，直説法現在時制のコピュラには非独立形と独立形の二系統があるとされる。非独立形が口語で用いられやすく，存在の解釈を欠くことを除けば，両者は交換可能だとされる（Windfuhr 1979, Mahootian 2002 など）。本発表では，明示的な標識を伴う焦点構文では独立形のみが可能であることを指摘する。さらに，ゼロコピュラを導入してコピュラ体系を捉え直すことで，焦点構文における生起制限を原理的に説明する。具体的には，非独立形はゼロコピュラと人称接辞から成ると分析する。人称接辞は音形を持つホストを要求し，焦点構文以外では vP 補部の句がホストとなる。しかし，焦点構文では当該の句が焦点移動するため，人称接辞がホストを失う。その結果，非文法性が生じる。本発表の分析は，焦点小辞が単に焦点となる句に付加するものではないこと，無形の要素の導入で文法記述がより体系的になること，形態素の音形の有無が文法性を決定し得ることを例証する。

[H-4]

クプサビニィ語の名詞の定性の区別：

Dryer の定性の標識の類型的研究の枠組みでの分析

河内 一博

クプサビニィ語（南ナイル；ウガンダ東部）の名詞には定の接尾辞が付いた形式と付いていない形式がある。本研究は，これらの定と不定の名詞の形式が自然な会話や民話等のデータにおいてどのように使われるかを分析し，Dryer (2014) の Reference hierarchy における適用範囲を調べ，この枠組みからわかる点，この枠組みで言語の多様性をとらえる上で考慮に入れるべきであると思われる点を指摘する。クプサビニィ語の名詞の定の形式と不定の形式はそれぞれ，Dryer の階層の定の領域と不定の領域に使われるのが原則で，この階層を支持しているように思える。ところが実際の使用においては，

名詞句の指示対象が均一的な成員から成る範疇を形成しているとみなされるような場合（特に指示対象が無生の場合）に階層の不定の領域に定の形式が使われることが多い。不定の領域における定の形式の使用のその他の要因も報告する。

[H-5]

ケチュア語アヤクーチョ方言の示差的格標示が示す対比性

諸隈 夕子

ケチュア語アヤクーチョ方言では，主節内では常に主語に対して-Ø，直接目的語に対して-ta という格標示が行われる。それに対して，接尾辞-sqa(既実現)または-na(未実現)によって名詞化された従属節内では, 主語に対しては-Ø または-pa(主節に置ける属格と同形), 直接目的語に対しては-Ø または-ta と，それぞれの格に対して 2 通りの格標示が許容される。ただし，主語の-pa と直接目的語の-ta は同じ節内では共起できない。

この示差的主語・目的語標示について，生成文法の観点からの先行研究は存在するが(Lefebvre 1988; Cole and Hermon 2011)，意味上の差異については未記述である。そこで本発表では，コンサルタント(40 代女性)との面談調査によって得られたデータを観察し，有標な標示(主語の-pa，直接目的語の-ta)が「有標な標示を受ける要素とその比較対象の間の対比」と「有標な標示を受ける要素に対する，話し手の予想と事実の対比」という二種類の対比的焦点という意味的機能を持つことを示す。

[H-6]

トゥバ語における疑問詞疑問接辞の否定文での用法：

egophoricity からの説明

江畑 冬生

トゥバ語では，肯否疑問文と疑問詞疑問文の構造が異なる。疑問詞疑問文では，疑問詞疑問接辞が述語に付加される。疑問詞疑問接辞は，疑問詞疑問文に加え反語文，譲歩節，相関構文にも現れるだけでなく，čok「ない」を述語とする平叙文（存在否定文）にも現れることがある。本発表では疑問詞疑問接辞がなぜ存在否定文にも現れるのかについて，同系のサハ語の疑問詞疑問接辞とも対照しつつ語用論の観点から考察する。存在否定文における疑問詞疑問接辞は，話し手（疑問文では聞き手）の心的状態の欠如を表す。3 人称の心的状態を主語とすることも可能だが，この時にも語用論的にはあくまで話し手の判断を含意する。本発表では結論として，トゥバ語の疑問詞疑問接辞は自己性(egophoricity) から統一的に説明可能だと主張する。この接辞は疑問詞疑問文では聞き手の知識から答えを得ることを想定する。存在否定文では話し手（疑問文では聞き手）のみが欠如の判断を行える。

[H-7]

ドゥンシャン語のコピュラにおける共時的考察

外賀 葵

ドゥンシャン語のコピュラには，固有語の wo と漢語からの借用語の shi の 2 つが存在する。本発表では，以下の 2 点を中心に共時的考察を行い，時制や疑問文についても分析を加え，従来の記述を精緻にした。

(1) 存在のコピュラ wo と存在動詞

存在の意味を表す形式には，コピュラ wo と存在動詞 wi-の 2 つがあるとされてきたが，存在場所・所有者の格表示を行う場合に両者とも与位格を取る点，コピュラ wo が存在の意味の場合，等位の場合とは異なる否定辞を取る点に注目し，「存在のコピュラ wo は，存在動詞の異形態」であると述べる。

(2) 漢語由来の shi の出現環境とその機能

shi の出現環境の分析により，主語が代名詞あるいは代名詞を含む語句，主語が数詞句，直前が漢語からの借用語の場合の他，とりわけ一種の強調構文や主部が長い場合にしばしば用いられることが多いことから，「shi には主語明示機能がある」という可能性を提示する。

＜ポスター発表　Poster presentations＞

[P-1]

西夏文字における，いくつかの左下要素の筆画について

荒川 慎太郎

チベット・ビルマ語派の死言語，西夏語を表記した西夏文字。その構成要素の中に，カタカナの「ノメ」「ノノメ」を上下に配置したような字形（3 画・4 画）がある。これらの上部に，漢数字の「一」のような横棒を加えた字形もある。「一ノメ」「一ノノメ」を上下に配した字形（4 画・5 画）と考えられてきたが，実際は「一くノ」「一ノくノ」（3 画・4 画）のように見える。

西夏語仏典からこの類の字形を調査すると，上の例ならほぼ例外なく，「ノメ」「ノノメ」は単独ならそのまま，上部に横棒を持つ場合は「一くノ」「一ノくノ」のような筆画になることが明らかになった。

一方，このような現象が見られるのは，「左下」に単独で位置した場合に限られることが分かった。結論としては，西夏文字のいくつかの左下要素について「くノ」型筆画を認め，関与条件として上部

の横棒「一」の存在を主張する。

[P-2]

日本語量化詞「ほとんど」の疑似量化解釈－ガーデンパス現象による実証的検討－

井上 雅勝, 藏藤 健雄, 松井 理直

藏藤他(2017)の調査では，量化詞「すべて」において，主語と目的語の両方が量化された場合には，片側量化の場合より疑似量化（量化詞の作用域を計算しない解釈）の割合が高まることが示された。一方，「ほとんど」の場合，そうした傾向は見られなかった。この結果に呼応するように，「すべての A が/すべての B を/X した/C を...」のような文の読み時間を測定した実験(井上他, 2018)では，片側量化よりも両側量化で，関係節主要部(C を)の読み時間が増加(GP 現象)したが，「ほとんど」の場合を検討した本研究では，そうした差は見られなかった。一連の結果は，疑似量化解釈がなされた場合，「X した」までの単文解釈の処理負荷が小さいため，解釈が即時に決定され，その結果 GP 効果量が大きくなるという仮説が妥当であることを示している。本発表では，2 つの量化詞の間でなぜ疑似量化の解釈のしやすさが異なるのかについての理論的論議も行う。

[P-3]

伊平屋方言の動詞・形容詞のアクセントについての考察

カルリノ・サルバトーレ

本研究では北琉球沖縄語伊平屋方言の動詞・形容詞のアクセント体系を記述することを目的とする。伊平屋方言は北琉球沖縄語の地域変種であり，伊平屋村で話されている言語である。本研究では伊平屋方言の動詞・形容詞にはそれぞれ 2 つの型（a 型と b 型）があることが確認できた。形容詞の場合はほとんどが b 型である。a 型は頭から高く，場合によって下降してから，平板な音調で続く。一方，b 型には形容詞語幹から上昇が見られる。名詞と比較して形容詞の型の区別は曖昧で，型の合流が観察できる。動詞の場合でも基本形で型の区別は難しいが，活用形で明らかになる。a 型の動詞は全体高くあるいは平板に発音されるのに対し，b 型では接辞に上昇する。

[P-4]

【発表者の都合により取り消しとなりました】

~~日本語学習者による遊離数量詞の解釈の習得~~

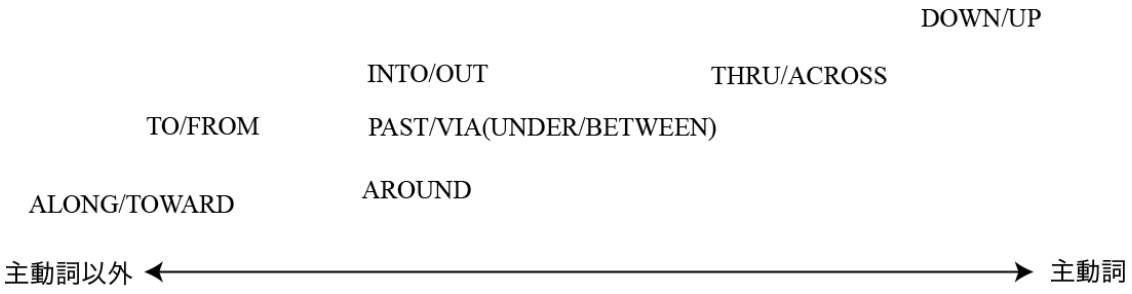
~~大熊 富季子~~

＜ワークショップ 1　Workshop 1＞

移動経路の種類とそのコード化：通言語的ビデオ実験による移動表現の類型論再考

企画・司会：松本 曜

言語による空間移動の表現には興味深い言語差がある。Talmy (1991)，松本 (2017)らは，移動の経路が表現されるのが文のどの構成素かという観点から，諸言語を分類してきた。しかしながら，経路の表現位置は経路のタイプによって異なる。本ワークショップでは，統一的な通言語的ビデオ実験によって，14 の経路（FROM, TO, TOWARD, PAST, VIA (+BETWEEN/UNDER), ALONG, AROUND, INTO, OUT, ACROSS, THROUGH, OVER, UP, DOWN)の表現方法を調査した結果を報告し，経路のタイプとその表現位置に関する一般化を試みる。諸経路は，主動詞でコード化されやすいものから主動詞以外でコード化されやすいものまで，緩やかではあるが一種のスケールをなすことを示す。さらに，そのスケールから移動表現の類型を再定義する。本研究は，科研 15H03206 及び国立国語研究所対照言語学プロジェクトの成果である。



フランス語移動表現における経路表示と類型論

守田 貴弘

フランス語ではテスト項目の経路のうち，位置変化が明確ではない TOWARD/ALONG のみ前置詞で経路を表示し，他の経路については動詞を使うことが多いという傾向が現れた。本発表では，動詞を用いた経路表現も一様ではなく，同じ経路局面，たとえば起点について，（1）partir de ‘go from’, arriver à ‘arrive at’のように vector と conformation を動詞と前置詞で分散コードするパターンと，（2）quitter ‘leave’, atteindre ‘reach’のように他動詞のみでコードするパターンが見られることを示し，これらの違いを他動性やアスペクトなどの観点から分析する。さらに，アスペクトや他動性の違いがフランス語では動詞の語彙項目の違いによって表現されるのに対し，他の言語では「主動詞 vs. 主動詞以外」という対立として現れる可能性も提案する。

クプサビニィ語とシダーマ語における通言語的傾向と類型タイプの現れ

河内 一博

移動表現において多くの場合，クプサビニィ語（南ナイル；ウガンダ東部）は付随要素枠付言語の特徴を，シダーマ語（東クシ；エチオピア南部）は動詞枠付言語の特徴を示す。類型的特徴の違いにも関わらず（cf. Slobin 2004），これら二つの言語の移動経路動詞の数に大きな違いはない。ビデオ実験の両言語のデータの経路の表現を比較すると，通言語的に動詞で表され易いとされる UP/DOWN や ACROSS と，動詞で表されにくいとされる TO や TOWARD では，一般的傾向が反映され，両言語はあまり大きくは違わない。一方，動詞で表され易くも表されにくくもない経路（INTO/OUT, VIA, PAST 等）には，移動表現の類型タイプが言語使用にある程度反映され，両言語で違いが見られる。なぜこのような経路の種類による違いが現れるかを，動詞と他の形態素との相違，語彙化の傾向，構文の特徴等といった点から考察する。

タガログ語移動表現の経路表示

長屋 尚典

タガログ語の移動表現は様態と経路が主要部 (=主動詞) の位置を巡って競合する。すなわち，文法的には，様態と経路のどちらも，主要部にも主要部外要素 (前置詞・副詞など) にもなることができる。本発表では，通言語ビデオ実験の結果を分析することで，タガログ語において，様態と経路のどちらが主要部になるかを決定する要因として経路の種類があると主張する。とりわけ，経路の表現方法が経路の種類によって異なっていること，ならびに，その傾向が本ワークショップで提案される序列におおよそ沿っていることを示す。たとえば，経路 TO が圧倒的に主要部外要素で表現される一方で，経路 UP は主動詞によって表現されることが多い。タガログ語については長らく pure verb-framed language (Huang and Tanangkingsing 2005:337) あるいは主要部表示型言語であると考えられてきたが，本発表は全く別の結論を導くことになる。

タイ語移動表現の経路表示

高橋 清子

タイ語移動表現の典型は様態動詞と経路動詞を組み合わせた動詞連続体である。経路表示には経路動詞を使う頻度が最も高い。経路動詞に「(名詞起源の位置前置詞+)経路参照点名詞句」が続いたり，最後の位置に「動詞起源の経路前置詞+(位置前置詞+)経路参照点名詞句」が添えられたりすることもある。これらの経路表示の使用傾向は経路タイプによって異なる。

本ワークショップで提案される序列の右側に位置する UP, DOWN, ACROSS, PAST, THROUGH タイプは位置前置詞句や経路前置詞句をあまり使わない。左側に位置する TO, TOWARD, INTO, AROUND, VIA, ALONG タイプは位置前置詞句を比較的多く使う。OUT, FROM タイプは経路(起点)前置詞句を比較的多く使う。また，また，直示動詞が多く使われるのは TO, TOWARD タイプで，その他の経路タイプは非直示動詞のほうが多く使われる。

＜ワークショップ 2　Workshop 2＞

叙述類型論の諸問題

企画：岩男 考哲，益岡 隆志

司会：益岡 隆志

文の叙述の様式には従来の文研究の主な対象であった出来事を表すもの（「事象叙述」）に加え対象の特性を表すもの（「属性叙述」）を認める必要がある。特定の時空間に出現する事象を叙述する文と所与の対象が有する属性を叙述する文では，その構文様式が大きく異なる。前者は叙述の枠を定める述語を主要部とする内心構造を基本とし，そこにはテンス・アスペクトが関与する。他方，後者は対象部と属性部からなる外心的な二部構造を基本とし，そこには主題（対象表示部）と解説（属性表示部）の関係が関与する。

本ワークショップでは，事象叙述と属性叙述を併置する見方の深化をめざし，（ⅰ）「属性」という概念の明確化，（ⅱ）属性叙述文と主題提示の関り方の具体的な提示，（ⅲ）テンス・アスペクトの叙述類型への関与のあり方の追究，（ⅳ）文以外の領域における叙述の類型の違いの意義の検討，といった諸課題に取り組んでいく。

属性の起源

三原 健一

主題文や属性叙述受動文などを初めとして，日本語文法のなかで「属性」を基盤とする構文は数多く，研究もさかんに行われてきた。しかしながら，属性自体については，あたかも自明の概念のように扱われ，属性を成立させる要因や，そもそも属性とは何なのかについて，本質的な議論がなされることは（あったとしても）極めて稀であった。

本発表では，例えば「この沢の水は甘い」であれば，次の①②の順で属性が発生すると主張する。①認知者 1 が，エコロジカルセルフとして認知する「この沢の水」を構成する特性のなかから，探索によって最適解と認知されるもの（「甘い」）を抽出し，メトニミーとして「この沢の水」と結び付ける。②認知者 1 は，「他の認知者 n>2 もそう思うだろう」と想定し，認知者を総称化することにより「この沢の水は甘い」が状態から属性に転化する。議論の過程で，主題の「は」，対象の持つアフォーダンス条件，形容詞のタイプにも言及する。

「評価属性」をめぐって

岩男 考哲

叙述の類型をめぐってはこれまで様々な概念が提起され議論が行われてきているが，そうした概念のなかには未だ十分な議論が行われているとは言い難いものもある。その 1 つが益岡（2012）において提示された「評価属性」という概念である。この概念は属性の「共存」という考え方と共に提示されたものであるが，意味論と語用論にまたがる広い概念であることもあってか，その位置づけについて考察の余地が残されている。

そこで本発表ではこの評価属性について，語レベルのものと文レベルのものとが存在すること，そして文レベルの「評価」とは話者と事態とのあいだに特定の「相互作用」が存在することを明示した結果生じるものであることを述べる。考察の具体的な対象としては，「は」を用いた提題文と「ときたら」を用いた提題文を取り上げる。また，このような話者と事態との相互作用に基づく属性叙述文が日本語以外の言語にも見られることにも言及する。

属性叙述におけるテンス・アスペクト体系

鈴木 彩香

出来事の時間軸上における位置づけや内的展開を問題にするテンス・アスペクトの研究は，これまで主に事象叙述文を対象としており，属性叙述文は主要な研究の対象とはされてこなかった。しかし，属性叙述文においてもアスペクトとテンスの各要素から構成的に意味が計算されている点は事象叙述文と同様であり，体系の総体を明らかにするためには属性叙述文におけるテンス・アスペクトの対立をも考察の対象とする必要がある。

本発表では，アスペクト対立が中和しているとされる「太郎は毎朝ジョギングをする／している」「太郎はもう予防接種を受けた／受けている」のような対立においても，テンス・アスペクト形式の対立に応じて意味的な対立が存在することを論じる。またその議論を通して，属性叙述文に現れるアスペクト要素も事象叙述文と共通して捉えられる意味を持つこと，テンス・アスペクト体系の総体を属性叙述文も含めて考える必要があることを主張する。

複合語形成における事象から属性へのシフト
—「X＋動詞連用形」型複合名詞を中心に—

由本 陽子

益岡（2008）が述べるように，属性叙述と事象叙述は完全に分断されているのではなく，両者間には「通路」が開かれている。日本語の動詞連用形を主要部とする複合においても，本来は事象名詞となる組み合わせ，例えば，非対格動詞と主語の複合語が，もっぱら属性を表すものと解釈される（e.g.「先割れ」cf.「地割れ」），あるいは，動名詞ともなり得る複合語が属性叙述にも用いられる（e.g.「会社勤め」「瓶詰め」）といった現象が見られる。しかし，このような語形成における事象から属性へのシフトは，無条件に起こるわけではない。

本発表では，まず，「X＋動詞連用形」型の複合名詞が属性描写に用いられ得るための条件は項の受け継ぎによって説明されることを明らかにし，次に，この型の複合語による属性叙述がどのタイプ（履

歴属性，カテゴリー属性など）になるかは，複合語の LCS，および X と叙述対象である名詞のクオリア構造（cf. Pustejovsky（1995））とから，ある程度予測できることを示す。

＜ワークショップ 3　Workshop 3＞

名詞構文を巡る諸問題

企画・司会：江口清子

名詞は動詞と並んで，ほぼすべての言語が有する品詞と考えられ，従来，さまざまな枠組みで名詞の意味や構造に関わる研究がなされてきたものの，名詞および名詞句単体での研究にとどまることが多い。しかし，名詞の種類とそれらが持つ意味情報や，文中で伴う格と統語構造の関係については，従来の動詞研究との融合という視点での研究，あるいは通言語学的視点での更なる研究が必要とされている。

そこで，本ワークショップでは，異なる言語の異なる現象を扱うことにより，名詞という品詞が共通して持つ特徴の一端を明らかにすることを目指す。具体的には 3 つの言語（日本語，ハンガリー語，シンハラ語）を取り上げ，それぞれの言語で名詞が構文形成に寄与する現象について考察する。各発表では，それぞれ英語や日本語などとの対照により対象言語における統語現象の特徴を探り，従来の動詞研究との融合という視点で，各現象についての解明を試みる。

ハンガリー語の所有接辞について

江口　清子

ハンガリー語には所有関係を表示するための形態的手段として，所有人称接辞の他に，所有接辞がある。所有接辞 -é は名詞に付加され，所有者によって所有される物を指す（例：Eriká-é「エリカの（もの）」）。所有接辞については，所有人称接辞に比べ，研究が非常に少なく，その構造の解明には問題が残っている。先行研究では大きく分けて 3 つの分析（1. 属格接辞としての分析，2. PossP の主要部＝所有人称接辞と同様の構造としての分析，3. 形式名詞 pro としての分析）が提案されているが，本発表では，日本語の「の」が不定代名詞として機能する構文（例：「それは山田さんのですよ。」）と同様に，先行研究における 3. の形式名詞としての分析ができることを示す。一方で，ハンガリー語の所有接辞は，日本語の「安いのがいい」のように形容詞と現れることはないため，この構文の成立には，所有者−所有物の意味関係が必要となることも示す。

日本語同格名詞句から見る名詞句の機能について

眞野 美穂

本発表では，日本語を対象に同格名詞句の構造を分析する。日本語の同格名詞句についての先行研究は非常に限られており，未だその構造については解明されていない部分が多い。特に，同格名詞句においては，何の形態素の介在もなく名詞句間の意味関係が解釈可能であり，それぞれの名詞句の持つ特性とそれらの間の関係がどのようにして決められるかについて解明する必要がある。

本発表では，構成名詞句の持つ特性と名詞句間の関係を詳細に検討することで，以下の点を主張する。1）同格名詞句には基本的に少なくとも 1 つ指示的な名詞句が含まれること。2）同格名詞句間の関係は，Heringa (2011) が英語の同格名詞句に対して仮定したように，名詞句間にコピュラの関係を仮定できること。3）コピュラ文と同様，措定・指定・同定のタイプが観察されること。これらの議論を通し，同格名詞句の分析がいかに統語研究に寄与できるかを指摘したい。

シンハラ語の名詞補文節について

岸本 秀樹

シンハラ語の名詞修飾節構文は，関係節と補文節の 2 つに大きく分けられる。このうちの名詞補文節の主語には，シンハラ語では，日本語で観察されるような主格-属格の交替はなく，もっぱら主格で標示される。しかし，写真名詞が主要部となる場合には，例外的に主語を主格で標示することも属格で標示することも可能で，一見，主格-属格の交替のような現象が観察できる。本発表では，シンハラ語の写真名詞構文におけるこのような交替現象は，日本語に見られる主格-属格の交替ではないことを示す。具体的には，2 つのタイプ写真構文は以下のような異なる構造をもっていることを示す。1) 主語が主格でマークされている時は，主要部名詞が埋め込み節として完全な節を導いている。2) 主語が属格でマークされている場合には，その主語は主要部名詞が選択する項となっており，埋め込み節の主語には，上位の属格名詞にコントロールされる目に見えない代名詞が現れる。

＜ワークショップ 4　Workshop 4＞

日本語の呼びかけイントネーション

企画・司会：窪薗 晴夫

日本語諸方言のプロソディー研究において，文節を超えたレベルのプロソディー分析は質量ともに少なく，とりわけ，人に呼びかける時の呼びかけイントネーション(vocative intonation)については，東京方言においても体系的な研究がない状況である。このワークショップでは語アクセント体系が異なる４つの方言—東京方言，鹿児島方言・甑島方言（鹿児島県），小林方言（宮崎県）—をとりあげ，フィールド調査をもとにした分析結果を報告する。特に着目するのが，各方言の呼びかけにいくつのイ

ントネーション型があるか？，名詞の語彙的なアクセント型がどのように変容するか？，アクセント型の中和現象が起こるか？，疑問イントネーションとどのように区別されるか？，４つの方言に共通する特徴は何か，以上の５点である。発表を通してプロソディー研究の新たな展開を紹介し，またフロアとの議論を通して新たな研究課題の発掘を試みる。

東京方言の呼びかけイントネーション

溝口 愛

東京方言の呼びかけイントネーションは, (a) 辞書形アクセントの強調形, (b) 最終音節の高ピッチ形, (c) 最終音節のピッチ下降形の３つのパターンに分類できる。たとえば起伏型の例では, “なおこ”（HLL）が(a) HLL，(b) HLH，(c) HL(HL)ˆとなり，平板型では“なおみ”（LHH）が，(a) LHH，(b) LHH，(c) LH(HL)ˆとなる（H=高，L=低。太字はピッチの強調を，(HL)ˆは音節内のピッチ下降を表わす）。いずれのパターンにおいても起伏型と平板型の対立は保持され，アクセントの中和は起こらない。３つのパターンは，呼びかけの目的や相手に対する感情（怒り，悲しみ等）によって使い分けがなされている。例えば, 相手を非難する時は(a) , 存在確認など疑問の意味合いを含む場合は(b) , 相手に依頼をする時や, 親近感を表現する場合には(c) のパターンがそれぞれ用いられやすい。

鹿児島方言と甑島方言の呼びかけイントネーション

窪薗 晴夫

鹿児島方言と甑島方言はともに２つのアクセント型（A 型，B 型）を持つ二型アクセント体系でありながら，前者は音節単位，後者はモーラ単位の体系を持つ。また後者はアクセントの山が二つ現れる（重起伏）という点で前者と異なる。呼びかけイントネーションについては「ピッチの下降」という点で両者は共通していた特徴を示す一方，その現れ方には顕著な違いが見られる。甑島方言ではすべての語が A 型で発音されるようになり(...LHL)，アクセントの中和が起こる。鹿児島方言では，A 型語でも B 型語でも，語末の２音節間でピッチ下降が起こるイントネーション型（Ⅰ型）と，最終音節内でピッチ下降が起こる型（Ⅱ型）の両方が観察される。A 型語と B 型語は同じ場面で同じイントネーション型を示すことがあることからアクセントの中和が起こると言えるが，Ⅰ型とⅡ型の２つのイントネーション型を示す点が甑島方言とは顕著に異なる。

小林方言の呼びかけイントネーション

平田 秀

宮崎県小林方言は一型アクセントの方言であり，すべての語において最終音節が高いピッチを担う。アクセント型の対立をもたないため，型の区別がなくなる中和現象は生じない。老年層の呼びかけイ

ントネーションは，最終音節が下降音調を担う形で実現され，この音節が重音節であっても軽音節であっても，音節内でピッチが下降する。また，老年層では疑問文に終助詞「-カ／-ケ」が義務的に付与されるため，呼びかけ文と疑問文は形態的に区別される。その一方で，この方言では話者間の差異が大きく，(a) 最終音節が軽音節・重音節の両者で下降の有無の揺れを示す話者，(b)最終音節が重音節の場合のみ下降の有無に揺れを示す話者，(c)最終音節が軽音節・重音節のいずれでも下降が起こらない話者の３タイプが観察される。全体的な傾向として，年齢が若くなるにつれて下降が起こらないパターンが多く見られる。